

琉球大学学術リポジトリ

沖縄県の高校生の将来の職業選択と進路意識の変容に関する研究：意志型と願望型の分析と1998年と2019年の比較を中心に

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部 公開日: 2020-10-22 キーワード (Ja): 沖縄県の高校生, 願望型と意志型, 職業選択・進路意識の発達 キーワード (En): Career Consciousness, Sense of Purpose, Career Education, high School Students in Okinawa 作成者: 下地, 敏洋, 島袋, 恒男, 多和田, 実, 盛山, 泰秀, Shimoji, Toshihiro, Shimabukuro, Tsuneo, Tawada, Minoru, Moriyama, Yasuhide メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/47081

沖縄県の高校生の将来の職業選択と進路意識の変容に関する研究 －意志型と願望型の分析と1998年と2019年の比較を中心に－

下地 敏洋*・島袋 恒男**・多和田 実*・盛山 泰秀***

A Study on the Transformation of Senior High School Students' Future Career Consciousness and the Sense of Purpose in Okinawa : Students' Character of Will and Desire Type and Comparison of Results Between 1988 and 2019

Toshihiro SHIMOJI*, Tsuneo SHIMABUKURO**, Minoru TAWADA*,
Yasuhide MORIYAMA***

要約

本研究の目的は、ここ20余年での沖縄県の高校生の大学進学率と就職率の大幅な上昇に対応する将来の職業選択と進路発達およびそれを支える意味ある他者親・教師・友人の変化を、1998年の結果との比較を通して明らかにすることであった。特に目的に向けて行動する意志型と、目的はあるが行動しない願望型の視点からの比較を行った。沖縄県各地区の普通高校2年生、900名程度が本研究の調査対象者となり1998年の結果と比較された。調査の結果、大学進学希望の高校生は1998年に比べ大きく増加していたが、家庭学習時間はそれに対応せずわずかに増加していた。将来の職業選択は若干の変動はあるが、基本的には「仕事の外面性」に基づく選択が顕著であり、深い職業理解である「仕事のやり方」「仕事の性質」に基づく選択は弱くなっていた。意志型と願望型の比率の比較では、明らかに意志型の高校生は大きく減少し、願望型の高校生は大きく増加していた。意志型と願望型の職業選択、その選択理由と進路発達および意味ある他者親・教師・友人の得点は、1998年同様意志型の得点が望ましい結果にあった。しかし、1998年の意志型の得点との比較では、高い学力が求められる職業の選択が少なくなり、職業選択の理由でも「仕事の外面性」の得点が上昇し、「仕事の性質」の得点は低下していた。進路意識でも「個人的将来目標」の得点は変化がなく、周りの人に認められたいという承認欲求に基づく将来・学習目標になっている傾向が見られた。これに関連して「意味ある他者・親」の得点が大きく低下していた。これらの結果から、一般的に大学受験・成績のための勉強という意識が強くなり進学率は上昇している。しかし、将来の職業目標が高校生の学習の在り方を方向づけるというキャリア教育の理念と目的は、十分に展開・浸透していない可能性が示唆されていた。高校生の個人的将来目標の育成の中での進学・学習指導の構築というキャリア教育の見直し・強化の必要性がうかがえた。

キーワード：沖縄県の高校生、願望型と意志型、職業選択・進路意識の発達

* 琉球大学大学院教育学研究科高度教職実践専攻 ** 琉球大学名誉教授

*** 琉球大学グローバル教育支援機構

1. 背景と目的

1972年の沖縄県の日本復帰後の沖縄県の教育課題として「学力向上」と「進学率の向上」が大きな課題として注目され、教育界を中心にその解決に尽力してきた。その後、高校生や大学生の「就職率」の問題も注目され学力、進学と関連して議論されるようになっていった。

上記の問題は、時の流れとともに少しずつ改善の方向性が見られるようになった。しかし、全国との比較では依然として開きが見られていた。今から20余年前の1998年沖縄県の大学進学率は、学校基本調査等によると28.0%近くにあり、高校生の就職率は72.2%近くにあった。当時の全国の大学進学率は40%を超えており10%以上の差異が見られた。その後20年余の2019年には沖縄県の高校生の大学進学率は40.2%に達し、高校生の就職率も97.7%に達している。しかし、それ以上に全国の大学進学率は向上し、55.0%に達し進学率の開きはより大きくなっている。

上の結果から、沖縄県の大学進学率と高校生の就職率は依然として全国の指標とは開きが顕著であるものの、20年余で沖縄県の高校生の進学率と就職率は大きく伸びていると見て取ることができる。この間の様々な教育改革に基づく学力向上やキャリア教育の導入による進路指導の強化、そして教育や就職をめぐる社会・経済環境の変化等にその要因を求めることができる。

では、ここ20年余で大きく改善された大学進学率や就職率の向上を受け、沖縄県の高校生の将来の職業目標やそれを支える進路発達の意識の在り方はどのように変容しているだろうか。教育の成果に直結する「大学以上の進学目的を持ち、その達成に向けて必要な行動を示す意志型の高校生」はどの程度増加しているだろうか。そして、彼らの希望職業や進路意識、およびそれを支える意味ある他者の在り方はどう変化してきているだろうか。

1998年、沖縄県の低進学率と低就職率の改善の指針とするべく、沖縄県教育庁は全県にわたる高校生3000名ほどを調査対象とする「調査に見る沖縄県の高校生の将来の職業選択と進路意識の特徴と問題点」と題する報告書を作成している。また、島袋(2007)は同データにより詳細な統

計分析を施し、「高校生の意志型・願望型の意味ある他者と進路発達に関する研究」を発表している。意志型とは「目的を持ちその達成に必要な行動を実行している」高校生、願望型とは「目的はあるがその達成に必要な行動の伴わない」高校生を指している。具体的には、大学以上の進学目的を持ち、一定以上の学習時間に従事しているかどうかでとらえることができる。上記の2つの報告では、家庭学習時間、進学希望水準、親の進学期待の認知、国語・数学の得意度が基本的事項として調査され、それに加えて将来の希望職業、それを希望する理由としての労働価値観(仕事の外面性、仕事のやり方、仕事の性質)への回答が求められ、また進路と学習への関心とその内面化の程度と進路・学習達成への社会的承認から構成される「一般的進路意識尺度」の調査と学習・進路に影響を与える「意味ある他者親・教師・友人」の程度に関する調査が実施された。以上の諸側面に関し性差が検討され、先に示した意志型・願望型の視点からその差異が統計学的に比較された。

その主な結果、性別では女子に意志型の生徒が多く、学年別では1年生、2年生では意志型の生徒は40%に達しないが、大学受験を控えた3年生では急に70%に達すること、地域別では那覇、宮古地区において意志型の高校生の多いことが報告されている。希望職業では、意志型の高校生に「大学の先生・研究者」「弁護士・裁判官・医者」「新聞記者・レポーター」の希望が多く、その他の大半の職業は願望型の高校生の希望する割合が高かった。職業選択の背景にある労働価値観では、意志型は職業の深い理解である「仕事のやり方」「仕事の性質」の得点が高く、反対に願望型は職業の表面的理解である「仕事の外面性」の得点が高い方向にあった。そのような意志型と願望型の高校生の間には、進路や学習に影響する意味ある他者親・教師・友人の得点が高く、同時に意志型の高校生は、学習・進路への関心、進路・学習達成時の満足の感情と進路・学習達成時の他者から承認を受ける程度に関する一般的進路意識の高さが見られていた。

意志型と願望型の差異については手段-目的関係の発達と自我発達の観点から下門(2003)の研究がある。下門(2003)は高校生を意志型と願望型に分類し、彼らの進路達成への統制感、そ

のための手段としての努力、能力、運、他者の援助の保有感について比較している。その結果、意志型の高校生において、進路達成への統制感が高く、そのための努力の保有感と他者の援助の保有感が高いことを確認している。意志型の高校生において意味ある他者の程度が高いということと一致する結果にある。また心理学的な自我発達の程度においても、「総合・統合・支配・有能性」「現実感覚」「刺激障壁」「自律的機能」「現実検討」の自我機能の高いことを示し、意志型の高校生の自我発達の高いことを確認している。つまり、意志型の高校生は自らを発信源として、周りの人々や社会、将来の目標に向けて自主的・能動的に行動・努力を通して働きかけていくという心理学的な発達をしているという特徴を示しているといえる。21世紀のグローバル時代に求められている大きな教育課題となっている主体的・能動的・活動的な学びと生活スタイルに近い姿にあることが考えられる。

これに関連して、島袋（2006）は中高校生・大学生の意志型・願望型尺度を作成し意志型の心理学的特性を細かく検討している。最初、中学校・高校教諭を対象に「目的を持ち努力する生徒」連想される言葉・特性を自由連想させ、それをKJ法に準じた形で整理し、それを基に意志型・願望型尺度を構成し、中高校生・大学生に調査を行いクラスター分析で整理している。その結果、尺度は主に進路や学習達成に関わる意志型A尺度と意志型Bの在り方を支える人間関係を中心とする意志型B尺度に分けられた。前者は「1.職業への関心、2.向上心、3.努力の認識、4.自己志向性、5.将来展望、6.努力への自信と対人関係、7.家庭学習習慣、8.知的好奇心と授業への集中」から構成され、後者は「1.友人志向、2.リーダーシップ、3.教師との関係と自己制御、親との関係と努力志向、従順・素直さ」から構成されていた。進学希望と学習時間に基づく意志型と願望型を比較すると概ね意志型A、意志型B尺度でも願望型の高校生に比べて意志型の高校生の得点の高いことが確認されていた。

以上の研究から、目的を持ち必要な努力を実行している意志型の高校生は、親・教師・友人との良好な人間関係の中で、進路や学習等の対話・会話を通して将来の目的を獲得し、その達成を目指

し必要な努力の過程を歩んでいる高校生であると考えられる。その姿こそが青年期の自立へと向かう自我発達である。中高校生や大学生の発達課題は自我同一性の確立にあるといわれているが、その確立はまさしく将来の職業の達成をめぐって展開されていると考えられる。

本研究の主な目的は、20余年前に比べて進学率や就職率がかなり向上した沖縄県の高校生の「意志型と願望型」の変化を把握し、彼らの将来の希望職業の特徴の変化、その背後にある労働価値観、進路意識とさらにその発達を支える意味ある他者の在り方等について1998年の結果と比較検討し、その上で今後沖縄県でより一層主体的・能動的・活動的な学びの育成が重要になるという視点から、今後の高校教育とりわけキャリア教育の在り方について考察することである。

II. 研究方法と手続き

1. 調査対象者

沖縄県内の北部、中部、那覇・浦添、南部、宮古・八重山地区の普通高校12校の2年生男女が今回の調査対象者である。その性別・地区別内訳を表1示す。性別では女子がやや多く、地区別では中部、那覇・浦添地区が多くなっている。なお一つの高校は全体的に性別の未記入があり分析から外した。1998年の調査で2年生は、北部=10.5%、中部=36.8%、那覇・浦添=23.9%、南部=14.2%、宮古=7.5%、八重山=7.1%となっており、それに比較して今回は那覇・浦添地区が多く、中部地区が少なくなっている。他地区では1998年と大差はない。

表1 調査対象者の性別・地域別内訳

	北部	中部	那覇・浦添	南部	宮古	八重山	計
男子	28人	98	144	74	38	34	416
(%)	(6.7)	(23.6)	(34.6)	(17.8)	(9.1)	(8.2)	(100)
女子	51人	125	161	79	35	32	483
(%)	(10.6)	(25.9)	(33.3)	(16.4)	(7.2)	(6.6)	(100)
計	79人	223	305	153	73	66	899
(%)	(8.8)	(24.8)	(33.9)	(17.0)	(8.1)	(7.3)	(100)

2. 調査尺度

①将来の希望職業：東江（1992）の 26 個の職業の中から希望する職業を一つ選択させた。職業は時代の変化に合うように一部ワーディングしなおした（表 9 参照）。

②希望する職業の選択の理由として 18 項目の労働価値観（藤本，1982）が各々どの程度あてはまるかを 5 段階評定させた。労働価値観は 1. 仕事の外面性，2. 仕事のやり方，3. 仕事の性質の 3 側面から構成されている（表 2 参照）。

表 2 労働価値観の内訳

	労働価値観の種類	具体例
仕事の外面性	1 安定性	長続きし失業の心配がない
	2 収入	収入によって人並みの暮らしができる
	3 社会的評価	社会から良い仕事と評価され尊敬される
	4 働く時間	働く時間が長すぎず休日休暇がきちんと取れる
	5 働く環境	働く場所が明るく清潔で快適
	6 上役	上役が筋道を守り公正で思いやりがある
仕事のやり方	7 奉仕的活動	人を助け社会のために奉仕すること
	8 美的活動	人々のため美を創造し社会の美化に役立つこと
	9 創造的活動	新しいアイデアを創造し新製品を考案すること
	10 研究的活動	調査研究し物事の真相や因果関係を明らかにする
	11 協同的活動	仲間とよい関係を保ち協力して働くこと
	12 管理的活動	人の上に立ち仕事の計画を立て割り当て指図する
仕事の性質	13 多様性	仕事内容が多種多様で時に応じて変化すること
	14 自律性	仕事のやり方が自分の責任で決められること
	15 達成感	努力の結果を自分の目で確かめられること
	16 能力の活用	能力を活かし向上できること
	17 性格の活用	性格・趣味にあい生かせること
	18 道義性	自分の信念や道徳観にあっていること

③意味ある他者尺度：

意味ある他者とは、子どもの社会化や成長・発達に影響を与える重要な役割を担う人物のことを指している。前回の調査同様高校生の進路と学習に望ましい影響を与える程度を親・教師・友人の 3 者に関する 18 個の質問項目について、5 段階であてはまる程度を評定させた。職業選択や労働価値観一般的進路意識の在り方を方向付けると考えられる。

④一般的進路意識尺度：

現在と将来の学業・進路への関心度，学業・進路目標の内面化，学業・進路達成時の社会的承認に関する 30 項目の質問に 5 段階であてはまる程度を評定させた（表 3）。

表 3 一般的進路意識の構造

	関心度	内面化	社会的商人の認知
現在	学業達成への関心	学業達成時の感情・満足	学業達成時の他者からの承認
将来	進路達成への関心	進路達成時の感情と満足	進路達成時の社会的承認

⑤上記尺度にデモ要因と家庭学習時間，希望進学水準，親の進学期待，国語・数学の得意度の調査項目を加え調査票を作成した。調査は調査校に依頼し担任教諭の指導のもと回答させ回収した。調査期日は 2019 年 6 月である。

⑥分析の視点：

今回の報告も 1998 年の報告に沿った分析を施し，両者を比較しながら結果を記述する。なお当時のデータが今回の利用可能な形になく直接的な統計的検定はできなかった。当時の割合の結果や平均値の記述統計による比較を行いながら結果を記述する。

III. 結果と考察

1. 家庭学習時間，進学希望水準，学力の得意度の認知の性差

将来の職業選択や進路意識の特徴等について検討する前に，高校生の基本的事項について検討する。沖縄県の 2019 年の高校生は 20 余年前の高校生に比べてどのような進学希望，家庭学習時間

を示し、国語・数学の得意度はどうなっているだろうか。

表4 家庭学習時間の性差

	0分	30分	1時間	2時間	3時間	計
男子	171人	102	96	37	8	414
(%)	(41.3)	(24.6)	(23.2)	(8.9)	(1.9)	(100)
女子	160人	128	132	54	8	482
(%)	(33.2)	(26.6)	(27.4)	(11.2)	(1.7)	(100)
計	331人	230	228	91	16	896
(%)	(36.9)	(25.7)	(25.4)	(10.2)	(1.8)	(100)

表4は2019年度の「家庭学習時間」の性差を示す。その結果、全体的に選択率の高いのは「1時間」の25.4%、「30分」の25.7%である。反対に「2時間」(10.2%)、「3時間」(1.8%)の選択率は低いことがわかる。また「0分」の選択は36.9%となり、特に男子の選択率は41.3%と高い。全体的に家庭学習に力を注いでいる姿はうかがえない。学校から与えられた宿題に取り組んでいる印象が強い。1998年の結果と比較すると、「0分」(36.9% vs 46.1%)、「30分」(25.7% vs 18.8%)、「1時間」(25.4% vs 18.1%)になり以前より、短いレベルでの家庭学習時間は増加している。しかし「2時間」「3時間の」の選択は逆に減少している。

では、「進学希望水準」はどのような形になるであろうか。表5に進学希望水準の性差を示す。

表5 進学希望の性差

	高校まで	短大・専門	大学	大学院	計
男子	6人	22	360	28	416
(%)	(1.4)	(5.3)	(86.5)	(6.7)	(100)
女子	9人	63	383	27	482
(%)	(1.9)	(13.1)	(79.5)	(5.6)	(100)
計	15人	85	743	55	898
(%)	(1.7)	(9.5)	(82.7)	(6.1)	(100)

その結果、女子の「短大・専門」の選択は男子より高率である。全体的には「大学」の選択が82.7%となり男女ともかなり高率である。1998年の「大学」の選択は56.1%であり、それからするとかなり大学進学希望者が増加していることになる。大学進学希望がかなり一般化しているということになる。多分にその分だけ家庭学習時間がわずかに増加していると思われる。

ここで1998年には分析がないがここで「親の進学期待」と「国語・数学の得意度」の性差について検討する。表6に「親の進学期待」の性差を

示す。その結果、若干の性差は見られるが男女とも親の83.2%が「大学」までの進学を期待していると認知している。高学歴期待がかなり一般化していることを示している。このように大学進学希望は20余年でかなり増加しているが、高学歴期待・希望の割には家庭学習時間の大きな変化は見られていない。この結果から20余年間の間に大学進学希望はあるが勉強には力が入らない「願望型」の高校生が増加していることが予測できる。

表6 親からの進学期待の性差

	高校まで	専門・短大	大学	大学院	計
男子	32人	17	347	8	404
(%)	(7.9)	(4.2)	(85.9)	(2.0)	(100)
女子	37人	45	381	8	471
(%)	(7.9)	(9.6)	(80.9)	(1.7)	(100)
合計	69人	62	728	16	875
(%)	(7.9)	(7.1)	(83.2)	(1.8)	(100)

上の結果を受け、高校生の「国語・数学の得意度」はどのような姿を示すであろうか。表7と表8に国語と数学の得意度の性差を示す。国語では若干女子で「得意」な方向にある。全体的には「少し得意」の選択は41.5%であり、「得意」を選択したのは11.5%であり、どちらかという国語の苦手な高校生の姿が見える。さらに数学の得意度では「とても苦手」「苦手」の選択は52.8%に上り「得意」は14.1%になっている。ここでは女子の苦手度の選択が高くなっている。

このように2019年の沖縄県の高校生の大学進学希望者はかなり多いものの、家庭学習時間は短く、それを受けて国語、特に数学の苦手な高校生が多く見られる結果になって。2019年の沖縄県の高校生、かねて指摘され続けられた「家庭学習習慣」の確立と定着に未だに大きな課題を残しているといえる。

表7 国語の得意度の性差

	とても苦手	苦手	少し得意	得意	とても得意	合計
男子	42人	168	164	36	6	416
(%)	(10.1)	(40.4)	(39.4)	(8.7)	(1.4)	(100)
女子	32人	167	209	67	7	482
(%)	(6.6)	(34.6)	(43.4)	(13.9)	(1.5)	(100)
合計	74人	335	373	103	13	898
(%)	(8.2)	(37.3)	(41.5)	(11.5)	(1.4)	(100)

表8 数学の得意度の性差

	とても苦手	苦手	少し得意	得意	とても得意	合計
男子	57人	114	145	83	17	416
(%)	(13.7)	(27.4)	(34.9)	(20.0)	(4.1)	(100)
女子	114人	90	128	44	6	268
(%)	(23.6)	(18.6)	(26.5)	(9.1)	(1.2)	(100)
合計	171人	304	273	127	23	898
(%)	(18.9)	(33.8)	(30.4)	(14.1)	(2.6)	(100)

2. 将来の職業選択

表9は将来の職業選択の性差を示す。表の結果から、全体としての選択率の高い職業を1998年と比較しながら挙げると「看護師・臨床検査技師」(15.7%vs5.8%)、「小中高の先生」

(12.5%vs12.5%)、「地方公務員」(10.9%vs6.3%)、「国家公務員」(9.1%vs8.4%)、「会社員・ビジネスマン」(5.6%vs3.3%)、「コンピュータ関係」(5.7%vs5.7%)となっている。看護師・臨床検査技師、地方公務員、会社員・ビジネスマンの選択率が以前より上昇している。「国家公務員、地方公務員、コンピュータ関係、設計士・技術者、警察官・消防士、大学の先生・研究者」は男子の選択率が高く、逆に「保育士・幼稚園の先生、小中高の先生、看護師・臨床検査技師」は女子の選択が高かった。少なからず時代・社会の変化を受け高校生の希望職業も一部変化しているが基本的に男子の希望する職業と女子の希望する職業はパターン化している結果にある。

表9 将来の希望職業の性差

希望職業	男子 (%)		女子 (%)		合計 (%)	
1. 会社員・ビジネスマン	33人	(66.0)	17人	(34.0)	50人	(100.0)
2. 国家公務員	48	(59.3)	33	(40.7)	81	(100.0)
3. 地方公務員	54	(55.7)	43	(44.3)	97	(100.0)
4. 店員・販売員	0	(0.0)	2	(100.0)	2	(100.0)
5. 保育士・幼稚園の先生	2	(7.4)	25	(92.6)	27	(100.0)
6. 小中高の先生	47	(42.3)	64	(57.7)	111	(100.0)
7. 大学の先生・研究者	17	(77.3)	5	(22.7)	22	(100.0)
8. 弁護士・裁判官・医者	14	(51.9)	13	(48.1)	27	(100.0)
9. 設計士・技術者	21	(87.5)	3	(12.5)	24	(100.0)
10. パイロット・FA	3	(18.8)	13	(81.3)	16	(100.0)
11. 運転手	1	(100.0)	0	(0.0)	1	(100.0)
12. 新聞記者・テレビポータ等	6	(66.7)	3	(33.3)	9	(100.0)
13. コンピューター関係	35	(89.7)	4	(0.3)	39	(100.0)
14. 不動産の仕事	1	(100.0)	0	(0.0)	1	(100.0)
15. 司法書士・税理士等	7	(43.8)	9	(56.3)	16	(100.0)
16. 旅行業	6	(23.1)	20	(76.9)	26	(100.0)
17. 自営業(店・工場の経営)	5	(62.5)	3	(37.5)	8	(100.0)
18. 建築業	9	(81.8)	2	(18.2)	11	(100.0)
19. 芸術家	5	(33.3)	10	(66.7)	15	(100.0)
20. 歌手・役者・タレント	5	(45.5)	6	(54.5)	11	(100.0)
21. スポーツ選手	9	(100.0)	0	(0.0)	9	(100.0)
22. 調理・理容・美容師	5	(55.6)	4	(44.4)	9	(100.0)
23. 看護師・臨床検査技師	27	(19.4)	112	(80.6)	139	(100.0)
24. 警察官・消防士	17	(77.3)	5	(22.7)	22	(100.0)
25. 農業・漁業等	4	(80.0)	1	(20.0)	5	(100.0)
26. その他	31	(28.2)	79	(71.8)	110	(100.0)
合計	412	(46.4)	476	(53.6)	888	(100.0)

では、このようなパターン化している職業選択の背景にはどのような職業観があるのだろうか。ここでは3つの労働価値観の得点の平均を基に高群と低群に分け両者の職業選択の比較をすることで沖縄県の高校生の職業観を探ることとする。表10に労働価値観の「仕事の外面性」(安定性、収入、働く時間等)の高群と低群での26個の職業の選択率の比較を示す。その結果、仕事の外面

性高群で選択の高いのは「会社員・ビジネスマン」、
「国家公務員」がある。反対に仕事の外面性・低群に選択の多いのは「保育士・幼稚園の先生」、「大学の先生・研究者」、「設計士・技術者」、「コンピュータ関係」、「芸術家」、「警察官・消防士」がある。この結果から1998年に顕著であった仕事の外面性に基づく職業選択は若干少なくなっていることがわかる。

表10 将来の希望職業の仕事の外面性高群・低群の差異

希望職業	仕事の外面性・低 (%)		仕事の外面性・高 (%)		合計 (%)	
	人数	割合	人数	割合	人数	割合
1. 会社員・ビジネスマン	22人	(45.8)	26人	(54.2)	48人	(100.0)
2. 国家公務員	36	(46.2)	42	(53.8)	78	(100.0)
3. 地方公務員	45	(47.4)	50	(52.6)	95	(100.0)
4. 店員・販売員	0	(0.0)	2	(100.0)	2	(100.0)
5. 保育士・幼稚園の先生	17	(63.0)	10	(37.0)	27	(100.0)
6. 小中高の先生	56	(52.3)	51	(47.7)	107	(100.0)
7. 大学の先生・研究者	17	(77.3)	5	(22.7)	22	(100.0)
8. 弁護士・裁判官・医者	13	(48.1)	14	(51.9)	27	(100.0)
9. 設計士・技術者	15	(62.5)	9	(37.5)	24	(100.0)
10. パイロット・FA	6	(37.5)	10	(62.5)	16	(100.0)
11. 運転手	0	(0.0)	1	(100.0)	1	(100.0)
12. 新聞記者・テレビレポーター等	6	(66.7)	3	(33.3)	9	(100.0)
13. コンピューター関係	25	(64.1)	14	(35.9)	39	(100.0)
14. 不動産の仕事	1	(100.0)	0	(0.0)	1	(100.0)
15. 司法書士・税理士等	8	(53.3)	7	(46.7)	15	(100.0)
16. 旅行業	13	(52.0)	12	(48.0)	25	(100.0)
17. 自営業(店・工場の経営)	5	(71.4)	2	(28.6)	7	(100.0)
18. 建築業	6	(60.0)	4	(40.0)	10	(100.0)
19. 芸術家	10	(66.7)	5	(33.3)	15	(100.0)
20. 歌手・役者・タレント	6	(66.7)	3	(33.3)	9	(100.0)
21. スポーツ選手	5	(55.6)	4	(44.4)	9	(100.0)
22. 調理・理容・美容師	2	(22.2)	7	(77.8)	9	(100.0)
23. 看護師・臨床検査技師	65	(47.1)	73	(52.9)	138	(100.0)
24. 警察官・消防士	15	(71.4)	6	(28.6)	21	(100.0)
25. 農業・漁業等	5	(100.0)	0	(0.0)	5	(100.0)
26. その他	76	(72.4)	29	(27.6)	105	(100.0)
合計	475	(55.0)	363	(45.0)	864	(100.0)

次に仕事のやり方(奉仕、美的、創造的、研究的、協同的、管理的活動)の高群と低群の間にある希望職業について比較する(表11)。表の結果から、「設計士・技術者」、「パイロット・FA」は仕事のやり方高群の選択が高くなっている。逆に「会社員・ビジネスマン」、「国家公務員」、「地方

公務員」、「旅行業」、「看護師・臨床検査技師」は仕事のやり方ではあまり選択されないことがわかる。1998年同様仕事のやり方で選択される職業は2019年でも若干の変動があるものの基本的な形は同一と思われる。いずれの年度でも仕事のやりかたという職業理解に基づく職業選択は顕著と

は言えない。キャリア教育等による職業理解はそれほど進んでいるとは推測されない結果にある。

表 11 将来の希望職業の仕事のやり方高群・低群の差異

希望職業	仕事のやり方・低 (%)		仕事のやり方・高 (%)		合計 (%)	
1. 会社員・ビジネスマン	27人	(54.0)	23人	(46.0)	50人	(100.0)
2. 国家公務員	52	(64.2)	29	(35.8)	81	(100.0)
3. 地方公務員	55	(57.3)	41	(42.7)	96	(100.0)
4. 店員・販売員	1	(50.0)	1	(50.0)	2	(100.0)
5. 保育士・幼稚園の先生	7	(65.4)	9	(34.6)	26	(100.0)
6. 小中高の先生	59	(53.6)	51	(46.4)	110	(100.0)
7. 大学の先生・研究者	10	(45.5)	12	(54.5)	22	(100.0)
8. 弁護士・裁判官・医者	4	(53.8)	12	(46.2)	26	(100.0)
9. 設計士・技術者	9	(37.5)	15	(62.5)	24	(100.0)
10. パイロット・FA	5	(31.3)	11	(66.8)	16	(100.0)
11. 運転手	0	(0.0)	1	(100.0)	1	(100.0)
12. 新聞記者・テレビレポーター等	5	(55.6)	4	(44.4)	9	(100.0)
13. コンピューター関係	19	(50.0)	19	(50.0)	38	(100.0)
14. 不動産の仕事	0	(0.0)	1	(100.0)	1	(100.0)
15. 司法書士・税理士等	8	(50.0)	8	(50.0)	16	(100.0)
16. 旅行業	18	(69.2)	8	(30.8)	26	(100.0)
17. 自営業(店・工場の経営)	4	(50.0)	4	(50.0)	8	(100.0)
18. 建築業	7	(63.6)	4	(36.4)	11	(100.0)
19. 芸術家	5	(33.3)	10	(66.7)	15	(100.0)
20. 歌手・役者・タレント	3	(27.3)	8	(72.7)	11	(100.0)
21. スポーツ選手	6	(66.7)	3	(33.3)	9	(100.0)
22. 調理・理容・美容師	5	(55.6)	4	(44.4)	9	(100.0)
23. 看護師・臨床検査技師	80	(58.8)	56	(41.2)	136	(100.0)
24. 警察官・消防士	11	(52.4)	10	(47.6)	21	(100.0)
25. 農業・漁業等	3	(60.0)	2	(40.0)	5	(100.0)
26. その他	64	(59.3)	44	(40.7)	108	(100.0)
合計	487	(55.5)	390	(44.5)	877	(100.0)

では、仕事の性質の高群と低群では職業の選択にどのような違いを見せるだろうか。表 12 にその結果を示す。仕事の性質高群(多様性, 自律性, 達成感, 能力・性格の活用, 道義性)の選択の多いのは、「大学の先生・研究者」, 「弁護士・裁判官・医者」, 「パイロット・FA」, 「コンピュータ関係」, 「芸術家」があり、1998年の結果では「大学の先生・研究者」, 「弁護士・裁判官・医者」, 「設計士・技術者」, 「新聞記者・レポーター」, 「自営業」, 「芸術家」, 「歌手・役者・タレント」, 「スポーツ選手」が挙げられていた。以前に比べて仕事の性質に基づいて希望職業を考える傾向が低下している。反対に、仕事の性質低群に選択の多いのが「会社員・

ビジネスマン」, 「国家公務員」, 「地方公務員」, 「小中高の先生」, 「新聞記者・レポーター」, 「看護師・臨床検査技師」, 「警察官・消防士」がある。ここでも1998年とほぼ同様の結果がうかがえる。

上記で検討したように1998年と2019年の間に高校生の希望する職業に特に大きな変動は見られない。しかし、仕事の外面性に基づく希望職業数は減少傾向にあるが、それが仕事のやり方や仕事の性質に基づく希望職業へと変化していると言いはし難い。未だ「仕事の外面性」という職業の表面上の理解に基づく職業選択の傾向があることを示している。

以上の結果から、沖縄県でもキャリア教育が実

施・展開され、職業への理解と体験を通じた教育が一般化している感がある。しかし、高校生の意識は「大学進学」に集中し、職業・就職は「大学卒業後」という意識にあり、キャリア教育が思いのほか功を奏していないと推測される。将来の希望職業という目的達成に向けて今の勉強を頑張るといふ形は、20余年前と同様弱いままとなっていると考えられる。

3. 進学における願望型と意志型の視点からの分析

ここで「大学以上の希望」と「家庭学習時間」のかけ合わせで高校生を「意志型」と「願望型」に類型化した。以下、両者の比較を中心に沖縄県の高校生の職業選択と進路意識等の差異について必要に応じ1998年の結果も参考にしながら分析していく。

1) 願望型と意志型の性差と地域差

表13は願望型と意志型の性差を、表14は地域差を示す。表から、全体の結果として願望型が61.1%、意志型が38.9%であることが示されている。男女差が顕著であり願望型は男子(64.1%vs58.3%)に、意志型は女子(41.7%vs35.9%)に多いことがわかる。1998の結果では願望型が52.4%、意志型が47.6%であったが、その結果と比較すると願望型の高校生が増加し、反対に意志型の高校生が減少していることになる。1998年に比べて家庭学習時間は長くなってはいたが、難関大学を目指す学習時間とは考えられず、男女とも願望型が10%以上増加し、逆に意志型は10%以上の減少となっている。その背景には少子化と大学の増加による大学の門戸の拡大と、学力向上を達成した小学校とは異なり、中学校での低学力が続いていること等が関係しているものと推測される。

表12 将来の希望職業の仕事の性質高群・低群の差異

希望職業	仕事の質・低 (%)		仕事の質・高 (%)		合計 (%)	
1. 会社員・ビジネスマン	25人	(50.0)	25人	(50.0)	50人	(100.0)
2. 国家公務員	42	(53.2)	37	(46.8)	79	(100.0)
3. 地方公務員	53	(57.0)	40	(43.0)	93	(100.0)
4. 店員・販売員	1	(50.0)	1	(50.0)	2	(100.0)
5. 保育士・幼稚園の先生	13	(52.0)	12	(48.0)	25	(100.0)
6. 小中高の先生	61	(57.5)	45	(42.5)	106	(100.0)
7. 大学の先生・研究者	8	(36.4)	14	(63.6)	22	(100.0)
8. 弁護士・裁判官・医者	12	(46.2)	14	(53.8)	26	(100.0)
9. 設計士・技術者	12	(50.0)	12	(50.0)	24	(100.0)
10. パイロット・FA	6	(37.5)	10	(62.5)	16	(100.0)
11. 運転手	0	(0.0)	1	(100.0)	1	(100.0)
12. 新聞記者・テレビレポーター等	5	(55.6)	4	(44.4)	9	(100.0)
13. コンピューター関係	17	(44.7)	21	(55.3)	38	(100.0)
14. 不動産の仕事	1	(100.0)	0	(0.0)	1	(100.0)
15. 司法書士・税理士等	7	(46.7)	8	(53.3)	15	(100.0)
16. 旅行業	13	(50.0)	13	(50.0)	26	(100.0)
17. 自営業(店・工場の経営)	3	(37.5)	5	(62.5)	8	(100.0)
18. 建築業	4	(36.4)	7	(63.6)	11	(100.0)
19. 芸術家	4	(26.7)	11	(73.3)	15	(100.0)
20. 歌手・役者・タレント	3	(27.3)	8	(72.7)	11	(100.0)
21. スポーツ選手	6	(66.7)	3	(33.3)	9	(100.0)
22. 調理・理容・美容師	4	(44.4)	5	(55.6)	9	(100.0)
23. 看護師・臨床検査技師	76	(56.3)	59	(43.7)	35	(100.0)
24. 警察官・消防士	15	(68.2)	7	(31.8)	22	(100.0)
25. 農業・漁業等	3	(60.0)	2	(40.0)	5	(100.0)
26. その他	57	(53.3)	50	(46.7)	107	(100.0)
合計	451	(52.1)	414	(47.9)	865	(100.0)

表 13 意志型・願望型の性差

	願望型	意志型	計
男子	246 人	138	384
(%)	(64.1)	(35.9)	(100)
女子	238 人	170	408
(%)	(58.3)	(41.7)	(100)
合計	484 人	728	792
(%)	(61.1)	(38.9)	(100)

次に願望型と意志型の地域差について検討する(表 14)。表の結果から最も意志型の比率が高いのは「宮古」(61.2%)であり、次いで「南部」(46.4%)、「北部」(42.9%)、「那覇・浦添」(42.0%)と続いている。1998 年の結果では「宮古」の意志型は 65.4%、「南部」は 43.8%、「北部」は 37.3%、「那覇・浦添」は 54.3%であった。宮古では若干意志型が減少し、南部と北部は若干増加している。那覇・浦添と中部は意志型の大きな減少になっている。「八重山」は意志型が 15.0%であるが調査対象者が少なく明確なことは言えない。那覇・浦添と中部において意志型の高校生が減少し、逆に願望型が増加しているのは都市化現象に伴う高校生の娯楽志向への生活スタイルの変化等と、そして那覇・浦添、中部に多い進学校での課外学習や通塾により、家庭学習時間が短くなっている可能性も考えられる。

表 14 意志型・願望型の地域差の比較

	願望型	意志型	計
北部	40 人	30 人	70 人
(%)	(57.1)	(42.9)	(100)
中部	133 人	66	198
(%)	(67.2)	(32.8)	(100)
那覇・浦添	83 人	60	143
(%)	(58.0)	(42.0)	(100)
南部	75 人	65	140
(%)	(53.6)	(46.4)	(100)
宮古	26 人	41	67
(%)	(38.8)	(61.2)	(100)
合計	357 人	262	619
(%)	(58.7)	(42.3)	(100)

2) 願望型と意志型の国語・数学の得意度の比較

表 15、表 16 に願望型と意志型の国語・数学得意度の比較を示す。その結果、国語では願望型の高校生も意志型の高校生も得意という方向にあるのが 50% 前後にあり両者に特に差異は見ら

れない。しかし、数学では意志型の高校生において「少し得意、得意、とても得意」の選択の合計が 51.3%、願望型の高校生が 45.7%を示し幾分か意志型の得意度の高いことがわかる。願望型と意志型の分類の基準は「家庭学習時間」が 1 時間以上と 1 時間未満であるが、1 時間という基準は大学進学を望める十分な時間とは言えない。そう考えると「得意度」の認知は学校での授業での学びに依存することになるが、両者には授業での学習程度に期待したほどの差異はないということになる。

1998 年の報告では、国語・数学の得意度のデータは分析されておらず残念ながら比較できない。

表 15 意志型・願望型の国語の得意度

	とても苦手	苦手	少し得意	得意	とても得意	合計
願望型	43人(8.9)	174(36.0)	209(43.2)	51(10.5)	7(1.4)	484(100.0)
意志型	23人(7.5)	126(41.0)	120(39.1)	35(11.4)	3(1.0)	307(100.0)
合計	66人(8.3)	300(37.9)	329(41.6)	86(10.9)	10(1.3)	791(100.0)

表 16 意志型・願望型の数学の得意度

	とても苦手	苦手	少し得意	得意	とても得意	合計
願望型	93人(19.2)	173(35.7)	143(29.5)	62(12.8)	13(2.7)	484(100.0)
意志型	47人(15.3)	102(33.1)	98(31.8)	52(16.9)	8(2.6)	308(100.0)
合計	140人(17.7)	275(34.7)	241(30.4)	114(14.4)	21(2.7)	792(100.0)

3) 願望型と意志型の将来の職業選択と労働価値観の比較

表 17 に願望型と意志型の職業選択の差を示す。その結果、相対的に意志型の高校生に選択の多い職業は「大学の先生・研究者」(54.5% vs 45.5%)、「弁護士・裁判官・医者」(61.5% vs 38.5%)の 2 つの職業がある。もちろん他の職業も希望しているが相対的に選択率は高くない。反対に願望型に選択率の高いのは「会社員・ビジネスマン」(64.0%)、「国家公務員」(58.4%)、「地方公務員」(63.6%)、「小中高の先生」(58.2%)、「コンピュータ関係」(77.1%)、「旅行業」(54.5%)、「看護師・臨床検査技師」(64.1%)とわりと多岐にわたっている。ここで意志型の希望する職業はかなり高い学力が求められる職業であり、その下で意志型の高校生は学習に向かう傾向のあることをうかがわせている。願望型が高く選択する「国家公務員」や「地方公務員」、「小中高の先生」および他の職業も高い学力が求められる職業である

が、願望型の高校生にはそのような進学や職業の 現実的理解が欠如しているのかも知れない。

表 17 将来の職業選択の意志型・願望型の比較

希望職業	願望型 (%)		意志型 (%)		合計 (%)	
1. 会社員・ビジネスマン	32 人	(64.0)	18 人	(36.0)	50 人	(100.0)
2. 国家公務員	45	(58.4)	32	(41.6)	77	(100.0)
3. 地方公務員	56	(63.6)	32	(36.4)	88	(100.0)
4. 店員・販売員	2	(0.0)	0	(0.0)	2	(100.0)
5. 保育士・幼稚園の先生	13	(81.3)	3	(18.8)	16	(100.0)
6. 小中高の先生	64	(58.2)	46	(41.8)	110	(100.0)
7. 大学の先生・研究者	10	(45.5)	12	(54.5)	22	(100.0)
8. 弁護士・裁判官・医者	10	(38.5)	16	(61.5)	26	(100.0)
9. 設計士・技術者	12	(52.2)	11	(47.8)	23	(100.0)
10. パイロット・FA	8	(66.7)	4	(33.3)	12	(100.0)
11. 運転手	0	(0.0)	1	(100.0)	1	(100.0)
12. 新聞記者・テレビレポーター等	5	(55.6)	4	(44.4)	9	(100.0)
13. コンピューター関係	27	(77.1)	8	(22.9)	35	(100.0)
14. 不動産の仕事	0	(0.0)	1	(100.0)	1	(100.0)
15. 司法書士・税理士等	9	(56.3)	7	(43.8)	16	(100.0)
16. 旅行業	12	(54.5)	10	(45.5)	22	(100.0)
17. 自営業 (店・工場の経営)	5	(62.5)	3	(37.5)	8	(100.0)
18. 建築業	5	(45.5)	6	(54.5)	11	(100.0)
19. 芸術家	8	(72.7)	3	(27.3)	11	(100.0)
20. 歌手・役者・タレント	3	(60.0)	2	(40.0)	5	(100.0)
21. スポーツ選手	8	(88.9)	1	(11.1)	9	(100.0)
22. 調理・理容・美容師	7	(100.0)	0	(0.0)	7	(100.0)
23. 看護師・臨床検査技師	75	(64.1)	42	(35.9)	117	(100.0)
24. 警察官・消防士	13	(76.5)	4	(23.5)	17	(100.0)
25. 農業・漁業等	4	(80.0)	1	(20.0)	5	(100.0)
26. その他	43	(52.4)	39	(47.6)	82	(100.0)
合 計	476	(60.9)	288	(39.1)	732	(100.0)

1998年の結果では、意志型の高校生が高く選択する職業として「大学の先生・研究者」、「弁護士・裁判官・医者」、「新聞記者・レポーター」が上がっていた。しかし、今回「新聞記者・レポーター」は意志型の選択する職業ではなくなっている。合計でも「新聞記者・レポーター」の選択は少なくなっている。反対に願望型では「会社員・ビジネスマン」、「地方公務員」、「保母・幼稚園の先生」、「パイロット・スチュワーデス」、「コンピュータ関係」、「旅行業」、「芸術家」、「歌手・役者・タレント」、「スポーツ選手」、「警察官・消防士」と今回より多岐にわたっていた。しかし、今回調査対象者が限られていることで全体的にその選択が減

り、明確な結果にならなくなっている。20余年後の今回も願望型の高校生に多岐にわたる職業選択が見られ、意志型の高校生には高い学力が求められる職業を希望する構図は基本的には変化していないと思われる。

それでは、ここで願望型と意志型の職業選択の理由としての仕事の外面性、仕事のやり方、仕事の性質の労働価値観の比較結果について検討する(表18)。表の結果から、「仕事の外面性」の得点に願望型と意志型に有意差は見られない。しかし、「仕事のやり方」と「仕事の性質」において願望型と意志型の間には平均値の有意差が見られ、いずれも意志型の高校生の得点が高くなっている。意

志型の高校生は明らかに職業の深い理解につながる「仕事のやり方」と「仕事の性質」を重視して将来の希望職業を形成していることを示している。

つまり、意志型の高校生は願望型に比べて職業的理解が発達していることを予想させている。しかし、1998年の結果では意志型の高校生の「仕事の外面性」の得点は42.7であるが、今回は46.5となり以前より仕事の外面性の得点が上昇している。願望型も同様に得点が高くなっている。「仕事のやり方」では1998年の結果と願望型も意志型も大差はない。しかし、「仕事の性質」の得点は意志型も願望型も2019年において平均値が低下している。20余年で意志型の高校生は「仕事の外面性」をより重視し、「仕事の性質」を重視できない職業選択をするようになってきている。

表18 意志型・願望型の労働価値観の比較

	願望型	意志型	t 値
仕事の外面性	46.75 (6.85)	46.52 (7.72)	n.s
仕事のやり方	34.34 < (8.34)	35.89 (7.74)	2.654*
仕事の性質	41.73 < (7.29)	72.75 (6.68)	1.944+

上の結果をさらに詳細に検討すべく表19に18個の労働価値観ごとに願望型と意志型の得点の比較を示した。表の結果から、仕事の外面性の「働く時間」において平均値の有意差が見られ、「願望型」の得点が高い。他の「安定性」「収入」「社会的評価」「働く環境」「上役」の得点に両者の有意差は見られない。しかし、1998年の結果では両者に明確な差異が見られていた。「仕事のやり方」では「奉仕的活動」「研究的活動」「協同的活動」において願望型と意志型の間に平均値の有意差が見られ「意志型」の得点が有意に高い。「奉仕的活動」と「協同的活動」は主に女子の意志型、「研究的活動」は男子の意志型の職業理解を反映していることが推察される。同様に仕事の性質でも「多様性」「能力の活用」「道義性」で意志型の高校生の得点が有意に高いことが明らかになった。ただ「自律性」は願望型の得点が高いが、自律性の「仕事のやり方を自分の責任で決められる」という高い能力を要する職務の意味を、「他人の

指図を受けず自分のやり方を重視する」という意味に受け取られた可能性がある。1998年には「願望型」の高校生は「仕事の外面性」に基づき将来の職業を選択し、反対に「意志型」の高校生は「仕事のやり方」「仕事の性質」に基づく選択が見られていた。しかし、20余年後の2019年には「仕事の外面性」に基づく将来の職業選択には差異が不明確になり、1998年に顕著であった「意志型」の「仕事のやり方」「仕事の性質」を重視する傾向は以前ほど顕著ではなくなってきた。ここ20余年でのキャリア教育の展開による進路指導の強化や教育改革・改善の取り組みの効果は高校生の意識的な職業的発達の促進に十分つながっていない可能性をうかがわせており、「将来の目標が今の生きる力を育む」というキャリア教育の理念は十分な浸透を見せていないことが考えられる。

表19 意志型・願望型の労働価値観の18個の比較

労働価値観の種類	願望型	意志型	t 値	
仕事の外面性	1 安定性	8.13	8.13	
	2 収入	7.66	7.48	
	3 社会的評価	6.81	6.94	
	4 働く時間	7.85 >	7.63	1.84+
	5 働く環境	8.02	8.14	
	6 上役	8.29	8.28	
仕事のやり方	7 奉仕的活動	7.29 <	7.77	3.50***
	8 美的活動	5.44	5.43	
	9 創造的活動	5.89	6.01	
	10 研究的活動	5.06 <	5.51	
	11 協同的活動	6.05 <	6.58	3.27***
	12 管理的活動	4.58	4.64	
仕事の性質	13 多様性	5.51 <	5.78	2.27*
	14 自律性	6.03 >	5.81	1.89+
	15 達成感	6.78	6.97	
	16 能力の活用	7.33 <	7.71	3.14**
	17 性格の活用	8.22	8.42	
	18 道義的	7.87 <	8.10	1.68*

4) 願望型と意志型の意味ある他者の比較

ここまで見てきたように願望型と意志型の高校生の間には、将来の職業選択とその選択理由としての労働価値観の在り方に違いが見られていた。その差異の傾向は、1998年の結果でも同様であった。そのような差異は子どもの社会化や発達に影響を与える「意味ある他者」によるところが大きかった。今回の調査でも意味ある他者親、意味ある他者教師、意味ある他者友人の影響が大き

いものと推測される。

表 20 は願望型と意志型の「意味ある他者・親」, 「意味ある他者・教師」, 「意味ある他者・友人」の平均値の比較を示す。その結果, 「意味ある他者・親」(9.87 vs 10.89), 「意味ある他者・教師」(9.92 vs 10.55), 「意味ある他者・友人」(12.82 vs 13.36) の, いずれにおいても意志型の平均値が願望型の平均値より有意に高いことを示している。この結果から意志型の高校生は, 親, 教師, 友人との進路や学習等に関する会話・対話・議論等を通して自らの将来や学習について考え行動していることが推測される。親や教師および友人からの進路に関わる情報や学習の情報を入手し, 時には相談やアドバイスを受け入れて行動しているものと考えられる。このような差異は 1998 年の結果でも同様であった。1998 年の得点(平均値)と今回の結果を比較した場合, 願望型(9.87 vs 13.1)も意志型(10.89 vs 14.3)も「意味ある他者・親」の平均値が低下していることを示している。その分「意味ある他者・友人」の平均値は願望型(12.82 vs 10.6), 意志型(13.36 vs 11.2)も得点が上昇していることがわかる。先に将来の職業選択において意志型の「仕事の外面性」の得点が以前より上昇していると指摘したが, 親子間の職業に関する会話・対話が低下し, その分受験と成績に関する会話・対話が重視されてきているかも知れない。キャリア教育の進展に伴い進路指導が強化され「意味ある他者・教師」の得点が上昇すると予測されが, 特にその結果にはない。

5) 願望型と意志型の一般的進路意識の差異

表20 意志型・願望型の意味ある他者親・教師・友人の比較

	願望型	意思型	t 値
意味ある他者・親	9.87 (3.65)	< 10.89 (3.63)	3.803***
意味ある他者・教師	9.92 (3.13)	< 10.55 (3.18)	2.761**
意味ある他者・友人	12.82 (3.41)	< 13.36 (3.50)	2.125*

先に検討してきたように, 意志型の高校生は願望型の高校生に比べて「意味ある他者親・教師・友人」の得点が高く, 進路や学習の対話・会話を通して将来の職業への理解を深め選択・決定し大学進学を考え学習につとめている姿が確認され

た。では, 具体的には①. 学習と進路への関心, ②. 学習進路達成への満足感, ③. 学習・進路達成への社会的承認から構成される「一般的進路意識」の在り方は願望型と意志型にどのような差異が見られるだろうか。ここでは 1998 年のデータに因子分析を施した島袋(2007)のカテゴリーで比較する。そのカテゴリーとは, 「1. 個人的将来目標(将来自分の仕事で努力できれば充実した人生送れる)», 「2. 社会的評価目標(希望の職業に就けば周りの人は一人前と認めてくれる)», 「3. 進路達成への不安(希望通りの進学ができるか向きになる)», 「4. 評価的学習目標(テストでいい点とったら両親や先生に褒めてもらえる)», 「5. 学習への関心(今勉強で頑張ることをここがけている)», 「6. 学習への無関心(授業を熱心に聞くことに注意を払っていない)」の 6 因子である。

表 21 は一般的進路意識の 6 因子の平均値を願望型と意志型の高校生で比較し差の検定を行った結果である。t 検定の結果, 有意および有意差の傾向が認められ, いずれも意志型の平均値の高いことを示している(6. 学習への無関心は得点が逆転)。つまり「1. 個人的将来目標(将来自分の仕事で努力できれば充実した人生送れる)», 「2. 社会的評価目標(希望の職業に就けば周りの人は一人前と認めてくれる)», 「3. 進路達成への不安(希望通りの進学ができるか向きになる)», 「4. 評価的学習目標(テストでいい点とったら両親や先生に褒めてもらえる)», 「5. 学習への関心(今勉強で頑張ることをここがけている)」の得点で意志型の平均値が高いという結果になっている。明らかに意志型の高校生は進路や学習において他者から評価されたいという目標を持ち, 同時に自分なりの進路目標と職業目標を達成したいという意識の高いこと, 学習への関心の高いことを示している。この結果は, 1998 年の結果でも同様な傾向にあった。ここで各得点の値を今回と 1998 年で比較する。「個人的将来目標」の得点は願望型も意志型も 20 余年間の差異はみられない。「社会的評価目標」「評価的学習目標」「学習への関心」は願望型も意志型も今回の結果において得点が上昇している。つまり親・先生に認められたいという気持ちが以前より高く, その下で学習への関心と, 親・先生に承認されたいという気持ちで学習

に向かっている姿が想像できる。その分、将来の進学に直結する「進路・成績への不安」の得点は願望型も意志型も低下している。親・教師・学校側の働きかけで進学と学習への関心・意欲が高くなっているが、その分、親・教師からの評価にも依拠した意識になっているのであろうか。結果として、高校生の「個人的将来目標」が現在の勉強での頑張りを引っ張るというよりは、むしろ親・教師の進学期待・学業期待の高まりが高校生の現在の学習での頑張りを支えている印象がうかがえる。自分の目標達成のために頑張るという「学習目標」での学びではなく、「親・教師に評価されるため頑張る」という「評価目標」での学びになっていることが推測される。親・教師の進学期待・学業期待に基づき学習へ取り組む姿も結果として意志型になるが、その場合はどちらかといえば「他律的意志型」という表現になる。そうではなく、高校生が「なりたい、就きたい」という個人的将来目標に基づき学習へ取り組む姿は「自律的意志型」としてとらえることが可能である。1998年から2019年にかけて願望型の高校生が増加し、意志型の高校生が減少しているということは、「自律的意志型」の高校生が減少してきているということに関係していないだろうか。高校生がどんな進路指導を受けたのかという「被進路指導体験度」と進路成熟の関係を検討した知念（2014）によると、将来の生き方や職業目標の育成に関わる「生き方の進路指導」の認知は、将来の生き方や働き方への自覚という人生進路成熟と職業的進路成熟の発達につながっていた。しかし、「受験指導・対策」という進路指導の認知は、大学受験を中心とする教育的進路成熟の発達にのみつながっていた。明らかに前者の進路指導がここで問題としている「自律的意志型」の高校生の育成につながっていることが考えられる。1998年から20余年後の沖縄県の大学進学率、高卒者の就職率の上昇は、「自律的意志型」の高校生の増加で説明するよりは、どちらかという「他律的意志型」の高校生の増加で説明可能と思われる。今後は「自律的意志型」への教育の展開が、高校生の職業的理解を高め、その結果として大学進学率と就職率の向上が期待される。下門（2003）は意志型の高校生は、願望型に比較して目標達成への自信、そのための努力と他者の援助の保有感が高く、かつ

青年期の自我発達が高いことを示していた。そのような目標志向性の育成が「自律的意志型」に関係している。

表21 意志型・願望型の進路・学習意識の差異

	願望型	意思型	t 値
個人的将来目標	27.11 (3.7256)	< 28.53 (3.59)	5.29***
社会的評価目標	21.62 (3.90)	< 22.52 (3.7718)	3.178***
進路成績への不安	20.08 (2.90)	< 20.86 (2.57)	3.857****
評価的学習目標	15.38 (2.65)	< 15.72 (2.78)	1.700+
学習への関心	9.34 (1.70)	< 9.70 (1.66)	2.905****
学習への無関心	6.16 (1.59)	> 5.48 (1.47)	6.04***

+ p<0.1 *P<0.05 **p<0.01 ***P<0.001

IV. 要約と全体的考察

ここ20余年で沖縄県の高校生の大学進学率と就職率の大幅な上昇が見られている。その原因は主として、キャリア教育や学力向上による高校教育の改善や大学の門戸の拡大、経済的發展に伴う就職環境の変化などが考えられる。高校教育の変化・改善によってここ20余年で沖縄県の高校生の進路や学習に関する意識や行動等の変容は大学進学率、就職率の上昇にどのように関連しているだろうか。そのような観点から、本研究は沖縄県の高校生の職業選択、その選択理由としての労働価値観、進路意識およびそれらの要因の在り方を支える意味ある他者の程度等について、1998年と2019年の比較を通して明らかにしようと試みた。

その結果、1998年に比較して2019年には大学進学希望者が大きく増加しているが、家庭学習時間は小幅な伸びにとどまり、国語・数学の成績についても「苦手」な方向にあることを示していた。そのことから以前よりも「意志型」が減少し、「願望型」の高校生が増加していることが予想された。

将来の職業選択では若干の変化が見られたが、基本的に男子が希望する職業と女子が希望する職

業という構図に大きな変化は見られなかった。その選択理由も一部の職業は仕事のやり方、仕事の性質で選択され、多くの職業は仕事の外面性に基づくという形に大きな変化はなかった。

さらに、大学進学という目的と学習時間の長短による意志型と願望型に類型化しその差異について1998年の結果と比較しながら分析した。その結果、1998年に比較して願望型の高校生が増加し意志型の高校生は減少していた。次に両者の将来の職業選択、その選択理由としての労働価値観、進路意識およびそれに影響する意味ある他者の在り方を1998年と比較しながら分析した。将来の職業選択の差異では1998年と2019年に特に大きな変化はなかった。しかし、1998年には意志型の高校生は高い学力を求められる職業を、仕事のやり方と仕事の性質を基に選択していたが、2019年にはその傾向は少なからず低下していた。また、1998年に比較して願望型も意志型も仕事の外面性の得点が上昇し、意志型の高校生も仕事の外面性を重視する方向にあった。この結果に関連して、意志型の意味ある他者・親の得点は1998年よりかなり、低下しており親子間の進路・学業に関する対話・会話が低下してきているかも知れない。一般的進路意識では1998年同様2019年も意志型の高校生の個人的将来目標、社会的評価目標、進路・成績への不安、学習への関心の得点が高かった。しかし、1998年に比較して、個人的将来目標の得点に変化は見られず進路・成績への不安の得点は低下し、反対に社会的評価目標と評価的学習目標、学習への関心は得点が増していた。そのような結果から、高校生の個人的将来目標が現在の学習行動をコントロールしている（自律的意志型）というよりは、大学進学の一一般化に伴う親・教師の進学期待・学習期待のもとでの学習行動をコントロールするという他律的意志型の傾向がうかがえている。この他律的意志

型の高校生は大学受験を間近に控える3年生で急増することが1998年の結果で示されている。20年近くかけての大学進学率の向上は高校教育の改善とキャリア教育の展開にも求められるが、自律的意志型の高校生の増加ではなく、他律的意志型の高校生の増加が大きいのかも知れない。今後、将来の職業目的を内面化した自律的意志型を育てるキャリア教育の展開が、今以上の大学進学率の向上と就職率の向上を実現するものと考えられる。

最後に、今回の調査は、高校1年、2年、3年生が調査対象であった1998年とは異なり、高校2年生のみが調査対象であり、調査対象者の偏りが大きく、かつ両年度の比較は記述統計を用いた。そのため厳密な統計的分析と比較はできていないため明確な結論とは言い難い。今後の更なる検討が必要になる。

引用文献

- 沖縄県教育委員会（1998）、調査に見る沖縄県の高校生の将来の職業選択と進路意識の特徴と問題点－願望型と意志型の比較－平成10年度「進路指導」、21-35.
- 島袋 恒男（2006）、中高校生及び大学生の意志型・願望型尺度による進路発達への検討 琉球大学教育学部紀要、69、75-94.
- 島袋 恒男（2007）、高校生の意志型・願望型の意味ある他者と進路発達に関する研究 琉球大学教育学部紀要、70、55-68.
- 下門 美恵子（2003）、沖縄県の高校生における意志型・願望型の進路発達と自我機能に関する研究 琉球大学大学院教育学研究科修士論文（未発表）.
- 知念 秀明（2014）、高校生の進路指導の認知と進路発達、自己調整学習の関係－「生き方の進路指導」vs「受験指導」－ 琉球大学大学院教育学研究科修士論文（未発表）.

A Study on the Transformation of Senior High School Students' Future Career
Consciousness and the Sense of Purpose in Okinawa : Students' Character of Will
and Desire Types and Comparison of Results Between 1988 and 2019

Toshihiro SHIMOJI, Tsuneo SHIMABUKURO,
Minoru TAWADA, Yasuhide MORIYAMA

Abstract

Purpose of the Study: The main purpose of this study is to report the status quo related to the senior high school students' career consciousness and the sense of purpose in Okinawa through the result of the questionnaire survey.

Design and Methods: The authors carried out the questionnaire survey on high school students' career consciousness and sense of purpose to 12 prefectural high schools in Okinawa. Respondents (N=899) completed the questionnaire and questions of each category were analyzed as descriptive data for this report. The descriptive data were compared with the data conducted in 1998.

Results: The results show that the tendency of students' career consciousness and the sense of purpose is almost the same as the result conducted in 1988. There are several differences between will and desire types: will types' students pay much more attention to social services and cooperation in the way of work and their ability in nature of work compared to their counterparts.

Implications: It is a good way for high school students to have more chances to talk about many topics related to their future jobs with parents, teachers, and classmates to improve their motivation to understand the importance of academic works and their future careers. Furthermore, the career education focused on life-long education should be considered in high schools, especially for male students and the desire-types' students.

Key words: Career Consciousness, Sense of Purpose, Career Education, high School Students in Okinawa